

---

# 大学図書館問題研究会 京都

京都市左京区北白川追分町 京都大学数理解析研究所図書室 (提議宛先付)

TEL 075-753-7223

---

## 列挙型から分析合成型へ

—「主題情報へのアプローチ」を聴講して—

小島沙織 (京大教育学部図書室)

10月26・27日、丸山昭二郎先生による主題分析の講義がありました。講義の内容をふりかえってみることによって、感想にかえさせていただきたいと思っています。

そもそも私がこの講義をうけたいと思ったのは、主題分析の方法を学ぶことによって「分類のゆれ」をある程度、防ぐことができると伺ったからです。この3月に勤めはじめるまで、いわゆる図書館学というものに接したことがなかったのですから、試行錯誤を繰り返しつつも少しずつ紹介していただいた本を読んで勉強しています。実務上でも、本を読んでいくうえでも、この「分類」はひっかかかるところの多い分野でした。そんな状況のなかで、主題分析についての講義は、私にとって願ってもないチャンスでした。

テキストである「主題情報へのアプローチ」(『講座図書館の理論と実際』第4巻)をしっかりと読んでいかないと講義についていけませんよとおどかさね、ざっと目を通し、それでも不安でもう一度読み直し、あとは当日を待つばかり。やはりわかりにくいのは、分析合成型分類法でした。

「この本の主題は、分析合成型の索引言語です。」丸山先生は、そのお人柄をしのぼせる穏やかなお声で、まず、「主題情報へのアプローチ」を書かれた動機と目的について話されました。索引言語とは、「情報システムに組み込まれた、主題の組織化および主題アクセスのために用いられる人工的な言語、ツールのこと」とありますが、具体的には、分類表や件名標目表などの人工言語を指します。

欧米の図書館では、1850年頃までは、固定配架法が用いられており、資料分類法は書誌分類法として適用され、資料は受入順や大きさによって整理されていました。しかし、1850年前後から、製紙と印刷技術の革新により図書の出版点数が増加するに従って、固定配架制では対応できなくなり、相対配架制に変化していきました。図書館資料自体を分類配架することで利用効果が高まることも明らかになり、図書館資料に分類記号を付与するための分類法が注目されるようになりました。その初期のものが、ハリスが発表した分類表です。

1876年から1906年にかけて、主要な分類法が発表されています。DDC（デューイ十進分類法）、EC（展開分類法）、UDC（国際十進分類法）などでこれらはすべて列挙型分類法です。列挙型分類法とは、予期された複合主題に対して、複合クラスの分類項目をあらかじめ用意しておく分類法のことです。必要となりそうな項目をすべてあげておくと、膨大な索引語彙となってしまいます。その例として、非十進列挙型であるLCC（アメリカ議会図書館分類表）をあげることができます。

20世紀頃になると、ふたつ以上の主題から構成される複合主題の図書が刊行されるようになり、列挙型分類法では複合主題に対応するのが難しくなってきました。そこで登場したのが、分析合成型分類法です。分析合成型分類法とは、資料に含まれている要素を一定の記号により表現し、合成することで、資料の主題を完全にあらわすことができるという方針にもとづいています。分析合成型分類法には、SC、CC、BCをあげることができます。

ブラウンによるSC（件名分類法）は、その分類表に列挙されている分類項目に、カテゴリー表のカテゴリー記号を付加することで合成することができます。しかし、区分特性の混合とか一貫性の欠如があり、完全なものではありません。また、特定の主題に関する図書は観点のいかんに関係なく一か所に分類されるのが、特徴です。分析合成型分類法のプロトタイプとしてその意義を認めることができます。

CC（コロン分類法）は、20世紀になって複合主題の刊行物が多くなってきたにもかかわらず、これに対応する分類法がないことを痛感したランガナータンによって考案されました。CCは、分析合成型分類法として最初のものであり、最初から記号合成と結びついたファセット構造をとりいれています。すなわち、複合主題をファセット分析し、つぎに分類記号で表現したファセットを、連結記号を用いて組み立てるのです。宝石などのカット面をファセットといいます。クラスを細分する区分原則（切り口）にはいろいろあります。そのうちのひとつの切り口によって得られる下位クラスの総体をファセットといいます。

CCのファセット構造は、PMESTの原則を採用しています。PMESTとは、五つの基本的カテゴリー、つまり、[P]パーソナリティー、[M]事物、[E]エネルギー、[S]空間、[T]時間のことです。パーソナリティーとはCC7で、[M]、[E]、[S]、[T]のいずれにもあてはまらないものとされていますが、具体的には、ある主題に、個性、独自で本質的な特性を与えるファセットのことです。事物とは、CC7で方法や特性または物質のことであるとされ、エネルギーは、活動、操作、過程、問題などの行動等をあらわすファセットであるとされています。

各基本主題は、それぞれファセット式が定められています。ファセット式とはファセット分析した結果に基づくクラス（記号）の列挙順序を示す式のことをさします。列挙順序が定められたというのは、画期的なことであり、LCCは、旧式な列挙型分類表としては、ファセット構造は守られているほうですが、列挙順序が正確に定められていないという欠点をランガナータンに指摘されています。

このようにCCは、ファセット分類法として極めて理論的で先駆的な分類システムです。しかし、改版のたびに試行錯誤が繰り返され不安定であること、用語が難解で表を使いこなすには熟練を要すること、記号が複雑であることなどの欠点もち、普及度も極めて低く、インドの一部の図書館と英国の2館とアフリカで使用されているにすぎません。

BC（書誌分類法）はブリスが、複合主題を完全に表現できるように独自の分析合成型の分類法を開発したものです。BC1版の4冊が完結したのは、1953年ですが、ブリスの死後、その管理維持がBC英国委員会に移されたことや、分類法をめぐる環境全体に、多大の変化があったことなどにより改訂が行われ、BC2版（BC2）が編纂されました。主題の配列が、知識の分類に一致して学問的であること、二者択一の方法を広範囲にとりいれ、分類表に融通を持たせていることなどにその特徴を見ることができます。BC2は分類理論上完成に近い手法で、実践的なものとしてよりも教育用、研究用に有用とされています。けれども、完成されていない表があり、普及度もCCと同じく極めて低くなっています。

以上、列挙型分類法から分析合成型分類法について、まとめてみましたが、大変興味深いものがありました。主題を分析し、合成する一連の過程が定められていれば、なるほど「分類のゆれ」は無くなるのだらうと思いました。頭で考えるのと実際にやってみるのでは、大きな差があるのでしょうか、日本ではほとんど使用されていない分析合成型分類法の考え方を学ぶことで、発想の転換の緒がつかめたような気がします。著者の意図を知るという意味でも、今回の機会は大い

